



Title	二十世紀初頭朝鮮における「学会」の体育思想とその活動について：『太極学報』の三つの体育論について
Author(s)	西尾, 達雄
Citation	日本社会事業大学社会事業研究所年報, 27, 245-257
Issue Date	1991
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44217
Type	journal article
File Information	NSJDN27_245-257.pdf



二十世紀初頭朝鮮における「学会」の 体育思想とその活動について

— 『太極学報』の三つの体育論について —

西尾達雄

問題の所在と研究目的

本稿は、これまで同テーマで検討を進めている「学会」という教育団体における体育活動とその思想についての考察の一環として¹⁾、太極学会を取り上げ検討しようとするものである。

これまで太極学会と体育に関する研究は、次の二つの著作に見ることができる。一つは、郭亨基の「近代学校体育の展開様相と体育史的意味²⁾」で、もう一つは、李學來の「韓国近代体育史研究³⁾」である。

まず郭亨基は、同著で「学会誌に反映した体育思想」を取り上げ、その一つとして「太極学会誌に反映した体育思想」を検討している。ここで氏は、太極学会が「当時の侵略国であった日本に位置しながら、国民教育の重要性を力説して、自強を達成するための第一の方法として『教育の振興』を主張し」ており、その中で体育の必要性を強調していることを、体育関係三点、教育関係二点の論文を引用しながら指摘している⁴⁾。その概略は以下の通りである。

まず李昌煥の「知育不如体育⁵⁾」という論文を「体育を知育より優先的にその必要性を強調している」ものと評価しており、そのような体育の必要性を強調しているものとして、崔昌烈の「体育を勧告す⁶⁾」、張膺震の「我国々民教育の振興策⁷⁾」、禹敬命の「教育の目的⁸⁾」を揚げ、その必要性を更に深化させ具体的打開策を提示した論文として文一平の「体育論⁹⁾」を評価している。また文一平の「体育論」については、「当時の国家

的危機を克服できる一時的体育振興策」として提言したものであるが、その提言の現代性は「実に先見之明のある見解」であると評価している。

このように郭論文は、教育における（特に学校教育における）「体育の必要性」という観点から体育論や教育論を評価しているが、同学報における諸論文は、教育における体育の位置づけ、すなわち三育の中の体育の位置づけと教育目標と体育の関係が論文によって若干異なるようであり、教育において体育がどのように必要とされたのかを検討する必要があるだろう。また同学報に見られる体育関連記事はこれ以外にもあり、上記の外の教育論や衛生論、国家社会論などの検討も必要であろう。

次に李學來の場合は、太極学報を個別に取り上げてその体育思想を検討したのではなく、当時の新文化の受容と近代体育の関係を論じる中で衛生論と体育論に関連する論文を同学報から引用したものである。その概略は以下の通りである。

衛生論としては研究生署名の「学生の規則生活¹⁰⁾」を挙げ、健康の重要性とその認識を紹介し¹¹⁾、体育論として三つの論文を引用している。体育論の評価については、李昌煥論文を「人間生活の基礎としての健康のため」の体育論であるとして、近代体育導入期における一般的普遍的体育思想の一つの表現としており¹²⁾、これに対して崔昌烈と文一平の両論文を民族主義的体育思想の形成の中で論じ、この二つの論文を近代的体育思想から民族主義的体育思想に転換していることを示すものと評価している¹³⁾。

この体育論の評価は、郭亨基の見解を補うものといえるが、この二つの体育論の傾向がどのような背景で生まれたのかについては十分明らかにされていない。また衛生論として一つの論文は取り上げているが、同学報に掲載された他の衛生論の評価はなされていない。もちろんこの著書では太極学会そのものを取り上げて分析したものではないので、こうした問題点はやむを得ないところであろう。

太極学会と体育に関する先行研究としては二つだけであるが、両者とも学報にある体育関連記事を全面的に取り上げて分析したものではなかった。そこで本研究の課題は、学報にある体育に関連すると思われる記事を教育、衛生、国家社会に関する論文、留学生や学会に関する記事、運動会や遠足などの記事からできるだけ多面的に取り上げ、太極学

会に見られる体育思想の特徴とその体育活動の実態を見ることである。しかしこの課題に接近するためには、まず三つの体育論文の性格と特徴を再検討し、そこで明らかにされた課題を踏まえて教育論、衛生論、体育行事等における体育認識との関わりを検討する必要がある。ここでは紙数制限との関わりでその前半部分に当たる部分を叙述し、後半部分は次稿で叙述することにしたい。

I 太極学会と太極学報

太極学会は、1905年9月15日、若干の留学生が中心になって新参留学生たちの日本語学習のための講習所の一つとして始まり、これが母体となり学会に発展したものである。その経緯を簡単に見ておこう。

まず、同年冬に「大朝鮮人日本留学生親睦会」という日本留学生最初の団体が組織された。しかしこれはまもなく解散し、新たに「帝国青年会」という親睦会が組織された。しかしこれもまた解散した。その後若干の空白期があったが、やがていくつかの学会に別れて組織されていった。その一つが太極学会であった。他に洛東親睦会、共修会、漢陽会等があった。このような離合集散は、思想的要因というよりも地縁的要因によるものと考えられる。というのは、これらの組織は、全てが地縁中心に再組織されたものであったからである。

この中で学会組織や活動が他のどの学会よりも大きかったのが太極学会であった。この学会は主に関西地方（摩天嶺以西の地方、平安道）の留学生が中心になった。

学会組織は以上のような経過をたどり、当初は、学習と親睦を中心とするものであったが、次第に学術研究と親睦を表面に掲げながらも時代の社会的要請に応えるものになっていった。こうした状況の中で必然的に生まれたのが「太極学報」という学会機関誌であった。

したがって「太極学報」の性格や目的は、表面的には会員相互間の親睦のためであったが、根本的には民族の主体意識の確立と徹底した国家観念、民族観念の扶植をめざしたものであった。同誌に見られる主義・主張は、侵略で踏みにじられた危険な民族現実を解決しようとするこ

ろに生じただけでなく、新しい近代への覚醒と新文化形成に重要な媒介的役割を果たしてきたといわれる¹⁴⁾。

「太極学報」は、1906年8月24日に創刊され、1908年12月24日通巻第27号で終刊した雑誌である。第1号から18号までは張膺震が、第19号から終刊までは金洛永が編集兼発行人の名義で刊行し、発行所は日本東京の太極学会事務所となっている。版型は、菊判各号六、七十ページ程度でできていた。

太極学会という学会名称の淵源は、「太極とは四千余年の歴史と二千万国民を有する我が大韓国家の威権を代表する旗号であり、即ち我が国民の精神である」(太極学報創刊号所載 尚灝「賀太極学報之創始」)と説明されており、太極は、まさに国家・民族の伝統的象徴としてその国家・国民としての覇気と使命感を欽慕、象徴したものであるといわれている¹⁵⁾。

同学会の主な構成員は次の通りである。

評議員には、張膺震(同会会長、当時東京高師生物科在学中、後に平壤大成中学校教師)、崔錫夏、金志侃、金永爵、金鎮福、李潤柱らが、事務員には、表振穆、朴濟鳳、金洛洙、金昌臺、張志台、蔡奎丙らが、会計員には金淵穆が、書記員には朴相洛が、司察員には、李道熙、金琮基、柳東秀らが担当した。その他会員には、金志憐、朴仁植、金滢穆、白成鳳、尚允植、文一平、金永哉、鄭雨植、張啓澤、洪正求、崔光玉、申相鎬らがあり、これらの多くは、当時の救国運動、新教育運動の重要な役割を果たした人々であった。

このように太極学報は、留学生という最も新しいエリートたちによる自主独立の哲学の表明の場であり、これを土台にして愛国啓蒙運動と新文化導入に最も密接な媒介的役割を果たしたものであったといえることができる。

同誌は、元来が27号まで出されたことは間違いないといわれているが、終刊号と思われる27号は、現在韓国内に所蔵されていないといわれている¹⁶⁾。

Ⅱ 体育論文の内容と特徴

既に述べたように同学報に見られる体育論は李昌煥の『知育は体育に如かず』、崔昌烈の『體育を勸告する』、文一平の『体育論』である。これらについてその内容の要旨と特徴について見ておこう。

① 李昌煥『知育は体育に如かず』

李昌煥は、まず「夫れ智育は何を謂う也や。體育は何を謂う也や。智育なる者天性を涵養し人智を開発する者也。體育なる者骨格を修練し人體の健全に為す者也。其の必要に及ぶは則ち一也。¹⁷⁾」と知育と体育を定義づけ、体育は骨格を鍛えて身体を健全にするものであるとしている。そのような健全な身体はなんのために必要なのであろうか。それは次のようにいう。

「然るに人生幸福上で論ずれば、各其の固有の生質有り、其の所望するところ各異なるに、或いは金錢を得て榮華生活者をもって幸を為す者も有れば、或いは名譽を得て世間に立つことに於いて幸を為す者も有り、或いは高登の官位で以て幸をなすもの有り、或いは智を磨き徳を修めて安心樂道者をもって幸を為す者も有り、以上の幸福なる者その性質に依りて各自同じゅうせず。然るに吾人一般に幸と為す者即ち他ならず健全なる身體たる者也。若し人々智育に勤め體育を怠り疾病に罹れば金錢と官位と名譽と智徳を保全すること能わざらんのみならず一旦忽然と世を去ること有り。此に反して身體健康なる人精神活発にして如何なる困難にも能く堪耐するを得。然るに則ち體育が吾人一般の幸福に基礎たる所以は確知の明言を待たず也。¹⁸⁾」

このように人により幸福観は異なるが、どんな幸福を求めるにせよ身体が健康でなければ幸福を得ることができない。それ故、体育は吾人一般の幸福の基礎であるという。こうして「なんぞ勉めざるか。なんぞ勉めざるか。吾人世に処し活動する時如何なる境遇に至れども如何なる幸福有れども身体不健全なれば能く志を遂げ業を為し一生幸福を享すること能わざるに、なんぞ懼れざるというなりや。まず體育を植付けしかる後に智育を開発すればこそ初めて完全なる事業を成すなり。幸を望む諸

公、これ研究されんこと伏して望む。¹⁹⁾」と述べ、体育で身体を鍛えた後に知育を行なう必要があるとしている。

このように李昌燮の体育論には、教育の土台としての体育という認識がみられるが、国家危機意識や愛国心との関係は明らかではない。むしろこれからの近代の人間は知育だけでは生きてゆけない、身体健康こそ生きるための土台であることが強調されており、旧学問の知育偏重を批判する近代主義的な教育論の一つであったということができよう。

② 崔昌烈『體育を勧告する』

崔昌烈は、まず「不肖崔昌烈、単刀直入に一言我が二千万同胞に勧告す。西哲の言に健全なる身体中には健全なる精神棲在すといえども、簡單なる此の言中に無限の至理包含す。²⁰⁾」と述べ、健全な身体には健全な精神が宿るという言葉の中に無限の至理が含まれているとして、当時の時代状況から体育を教育の中に位置づけている。つまり「何となれば、此の二十世紀は優勝劣敗の競争時代なり。相当の腕力有さざれば個人生活に落第せんのみならず国家的生存も淘汰免れえざる故、吾人何ぞ腕力養成に注意せざるか。故に世界文明各国の教育は三育中に体育を入れ活発な氣力を養育せんと勤勤孜孜するをもって、文明国人智徳を有するのみならず体力を兼備し平時には健全なる身体をもって社会的事業に従事し戦時には活躍する身体をもって軍国的義務に献身し自国を發展せしめるなり。是すべて是の体育の効果というべきなり。²¹⁾」

このように彼は、優勝劣敗の競争時代であるこの二十世紀において世界の文明各国の教育は、三育中に体育を入れ、活発な氣力を養育している。しかし「我が韓然からず。百余年以来教育の大方針文芸に帰一し体育全く知らざるによりて国民の身体日益に残弱し活発なる精神と健康なる氣力日々漸懷す。ただ退歩を知りて進歩を知らざる。今日の如き地位に当りて余は我が韓独立の基礎は国民に体育を奨励するに有りと言わん。²²⁾」と述べ、今日の韓国の実態は、体育をまったく行なわず国民も国家も退歩を知り進歩を知らない状況に至ったというのである。これが国権喪失の要因でもあった。したがって我が韓独立の基礎は国民に体育を奨励することにあるというのである。

ここには、「二十世紀は優勝劣敗の競争時代だ」という時代認識とと

もに明確に国家危機克服の土台としての体育の位置づけが見られる。これは単に、三育中の体育の価値を「人生の幸福の基礎」としての一般的価値に留めるものではなく、独立のための「活発な気力の養育」として愛国的精神教育との結びつきが見られ、国家独立の基礎としての国民体育の奨励が最も重要な課題であることを訴えたものといえることができる。

③ 文一平『体育論』

文一平は、まず健全な国民を養成する道は徳知体の三つの教育にあるが、その中で体育を第一に置き人材の育成に努めるべきであるとして、次のように述べている。

「健全なる国民を養成する道は教育にあれども、大凡教育の旨を分析して言えば、徳知体育三者なり。此の三者において体育が其の一に居するは何也か。曰く身体が存し然る後にこそ精神が生ずる。樹木に譬うれば身体は根柢なり、精神は枝葉なり。根柢堅固なれば則ち枝葉随いて繁茂し、万一根柢薄弱なれば則ち枝葉亦随いて残衰は必然の理なり。

然るに則ち樹木を栽培する者は必ずや根柢より始めん。人材を養成する者はまず身体に起点を作すべきなり。即ち体育是なり。²³⁾

しかしそれに止まらず、体育の目的は、身体を鍛練して精神を發展させることにあり、徳知両育を完全にしようとするれば、まず体育を完全にさせるべきであると述べ精神教育と体育との関わりを次のように強調している。

「蓋し体育の目的は、身体を鍛練し精神を發展させるに在り。換言すれば精神の發展させんが為に身体を鍛練するなり。仮令思想を綿密にせんとすれば、頭脳を健全にし得べきなれど、気力を雄大にせんとすれば筋骨を強壯にし得べきなり。所以に徳知両育を完全にせんとすれば、まず体育を完全にし得べきなり。²⁴⁾

このように文一平も、体育は精神教育の土台であるとともに精神教育を發展させる目的を持つという一般的性格から体育の必要性が訴えられている。ところが、「実に体育の関係かくの如く密接にして影響重且大なるを世人往々此を誤認し、輒（どうかすると）曰く体育は兒童の一遊戯運動に過ぎざると尋常に附し甚だしき者は此を排斥此を叱唾す。何ぞ慨歎せざらんか。²⁵⁾」という状況であった。このような誤解を啓蒙する必

要性からまず体育の一般的性格が上げられたということができよう。

しかし文一平はそれだけではなくて、さらに「今日吾輩」の身体的課題からそうしなければならないというのである。

つまり、「嗚呼今日吾輩を試看せよ。二八時代に形容槁枯し体幹が屈曲し活発氣象乏しく勇敢精神衰えたるは殆ど八十老翁の状態に在り、青年の青年たる価値を損失したるは、抑（そもそも）此之の故なり。さらに目を転じて通国を環視するに皆是吾輩の如くに身体が虚弱なる故に、一家庭をもって觀察するに仮令十人の一室に五人毎常疾病と知舊にあれば家門の平和破壊し憂愁交集して人生の幸福遠別して一平生を無情なる病裡に葬送しその不幸甚だしく、さらに女子に至りてはこの虚弱症最多なるに、その最大の原因上流女子に在りては日常の間談（無駄話）、睡眠等懶散（ぶらぶらして怠けている様子）によりて、中流以下の女子に在りては紡績洗濯等勞役により面相蒼白にて血液漸枯するか、畢竟夭死するかなり。然らざれば則ち癱疾に罹る者その数計り得ざるや。悲しきかな夫れ今家庭に王なる女子がかくの如く不完全なればその家庭なんぞ完全なるか、子孫の母なる女子がかくの如く不健全なればその子孫なんぞ健全なるか。我が同胞名を二千万といえども残病、癱疾者を除けば幾人かに過ぎざるなり。此等半死的の國民を有する國家が隆盛する理が豈有らんや。文化退歩するも此に在り教育進歩せざるも此に在り。大聲疾號して國中に救済の方針を醒告せんか。一般國民の体育を奨励すべきなり。²⁶⁾」

このように我々青年の身体狀況は、若いにも拘らず体幹は屈曲し活発な氣象が乏しく勇敢な精神が衰えており殆ど八十の老人の状態である。國中を見渡しても同様だ。とりわけ女子の身体的衰退は甚だしく、上流階層では無駄話しや睡眠で活動的な生活をしておらず、中流以下の庶民は働き過ぎで病寸前の状態である。子供を産み育て家庭を守るべき女子がこのような状態で将来の子供がどうして育てられるであろうか。家庭が不完全で半死的の國民を有する國家が隆盛するはずがないのである。それ故に一般國民の体育を奨励すべきだというのである。そしてその根拠を古今東西の歴史と現状から学んで次ぎのように述べている。

「往古希臘斯巴塔（スパルタ）にては兒童の産まれたる後に男女論ずること勿く、政府身体検査を執行して虚弱なる者は将来社会國家に公民

たる責任を堪任できぬとして山河に抛棄（放棄）し、惟その健康なる者のみ父母の懷中に善く養なわせるに、七歳以上に達せば政府自取して教育を施し純全たる軍律主義をもって体育を専注し忍耐性と冒険心を發揮し多数の力士勇人を製造したるに、此の教育の効果大、現に国運が日進月盛し遂に希臘の一部の覇権を掌握し、波斯（ペルシャ）の雄師百万を撃滅したるなど甚だしきなり。スパルタ教育の方法こそ人情の忍ばざるべき所なり。然るに体育の効果果していかに重大なること吾輩が此に足証せむ。

況んや今獅吼狼叫する競争場裡に各国自国に対しては腕力を比較する時代に当たり、小をもって自身大をもって国民を論ずることなく、蒲柳弱質には到底彼の松梢勁節を圧倒して生存を保持させるに能わずなり。是故に、欧米列強にては早くより此に觀鑑して一般家庭社会に於て此に対する注意を怠らざるのみならず、特に軍人学校以外に体育学校を建設し毎年多数の卒業生を出し、全国の体育を指導奨励するものなり。その優雅なる気象と勇敢なる精神遠く東洋人の及ばざるところなり。その例を略挙すれば、年前に英人某氏が行年九旬に世界を遊歴せんとして西洋より東亜諸邦を巡回し、日本国東京に到り、その教堂で演説したるが、白髮皴顔に秋氣蕭々（ショウショウ：ひゅうひゅうと風がふき抜ける様）なるが、雄大なる聲音と活発なる姿勢尚此青年に一歩も譲頭せずなり。近来北陸の探險隊を組織して空中に飛行艇を搭乘する者泰西人にあらずや。我国に在留する宣教師を觀してもその一斑を窺うこと可なり。

近日東洋に論じても、日本は古來に武士道を崇尚する故に、一種の劍術盛行し自然と体育上に多大の利益を予め、維新以後にては更に体育の必要を覚悟して、欧米諸國に留学生を特派して体育の研究を精細蘊積せしめ、及びその帰來しては、体育に関する書籍を著述刊行し、体育学校を特設し教育界の新局面を劈開す。学校体操（普通、兵式兩者）以外に江河には短艇競漕有り、陸地には乗馬競争有り、また劍術、柔道、角力等盛行す。尚此不足するを憂慮して体育科専修次に海外に遊学する者多く、新報雜誌等は同心並力して某所に運動会或いは角力場有れば瀝血歡迎して紙上に争掲して、皇子公卿等は某校に擊劍会或いは競馬場有れば、枉駕親臨して優等に褒賞す。挙国風靡し一世雲從して体育駸々進歩すれこそ今日の強悍に到れり。是由に之を觀れば、体育が個人の精神に

密接な関係は有るのみならず国家の運命に重大な影響を及ぼすなり。此何ぞ忽諸尋常に付せんや。²⁷⁾

このように文一平は、古代スパルタでは国家の政策によって強健な子供を育て、国運の隆盛を図った。今日の競争社会においてはなおさらであり、各国はそれぞれ腕力を比較する時代に当たり、国民の体力育成に臨んでいる。特に欧米列強では早くから一般家庭や社会で注意を払い、軍人学校以外に体育学校を設けて国民体育を指導奨励しており、東洋でも日本は維新以後には体育の必要を自覚して体育学校を特設し教育界の新面目を劈開していると述べ、体育が個人の精神に密接に関係するのみならず、国家の運命に重大な影響を及ぼすものであることを指摘している。

こうして彼は、一時的対策ではあるが、至急に次のことを提言したいとして次のように述べている。

「故に余は薄識にも拘らず体育に関する管見を蕪陳して同胞人士の一覽に供せんとす。

1. 体育学校(位置不定)を特設して体育師を養成(年限不定)する事
1. 科目は体操、擊劍、乗馬等を置く事
1. 学校、家庭で特に注意する事
1. 体育に関する學術を精究に為し品行端正身体強壯なる青年を海外(欧米或日本)に派遣する事

以上数条は決して完全なる方針には全くあらざるが、一時の感に触れ走筆を妄任せん。²⁸⁾

以上のように文一平の場合、体育が三育における起点であるというのは、近代的普遍的意味だけではなく、競争場裡の今日における競争は「腕力を比較する」ものであり、体育の在り方が個人の精神のみならず国家の運命に重大な影響を及ぼすという認識に基づくものであった。そのために雄大な気力と強壯な筋骨が必要だというのである。その気力とは、「生存滅亡の危路に」堪え忍ぶ「耐力」²⁹⁾、「国家の独立」のための精神的・思想的・言論的「自主心」³⁰⁾であった。また、そうした気力を持った青年が立派に国内で活動していくためには、国内の状況に適應した活動をする必要があるとして、倫理的思想としての「礼儀俗」が必要³¹⁾であることを明らかにしている。このような点から見て、文一平も崔

昌烈と同様に独立のための愛国的精神の育成と体育を結びつけて考えていたということができよう。しかも文一平はそれを実現するための方法をより具体的に提起した点で他の体育論文を超える内容を持っていたといえよう。

Ⅲ 考察と課題

以上三つの体育論を論文の内容に沿ってその特徴を明らかにしてきた。ここから次の二点の特徴を指摘することができる。

第一点は、三つの論文の共通点として、教育における体育の重要性を指摘し、三育の中で最も重要なものとして体育を位置づけていたことである。第二点は、これらの中には二つの異なる立論の特徴があったことである。一つは李昌煥のように「人間生活の基礎としての健康のため」の体育論であり、健康な身体づくりのための体育を基礎として知育徳育を発達させるというものであった。もう一つは、崔昌烈や文一平のように国家独立のための強壮な身体と愛国精神の育成の手段としての体育論である。

ではこの立論の相違は何を意味するのであろうか。この点に関して李學來は、先に示したように李昌煥論文を近代体育導入期における一般的普遍的体育思想の一つの表現として評価し、崔昌烈と文一平の両論文を近代的体育思想から民族主義的体育思想に転換していることを示すものと評価している。これは次のように説明される。「個人主義的合理主義を基本理念とする西欧の近代思想はそれ自体内に民族的な契機を内包しなかったのであり、体育思想にも民族的な契機を内包しないものなので、体育思想にも民族的特性を強調するよりは、人類生活において一般的普遍的な原則のみが強調されたのは当然であった。³²⁾」ところが「韓末の国権喪失の危機を迎えて積極的に国権を回復しようとする立場から、即ち民族内部の必要によって、近代的体育思想を民族主義的体育思想に変化させたものであった。³³⁾」というのである。

しかし太極学会の活動は、1905年9月15日設立されたところに始まり当初は新参の留学生の日本語学習の為の講習所として作られたもので

あったが、これが母体になって学会に発展し、1906年8月にはすでに見たように迫りくる外国の侵略の前に国権を守護するという大きな目標をもって「太極学報」を発刊したのである。この学報発刊の趣旨は、当時の愛国啓蒙運動を行なっていた他の学会と基本的に同様であった。そこではすでに民族主義的課題に直面しており、李昌煥論文（近代主義）から崔昌烈と文一平の両論文（民族主義）への転換というよりも、すでに三つの体育論文の中には民族主義的課題があったと見るべきではなからうか。すなわちこの三つの体育論の二つの立論の相違は、民族主義的課題に対する教育目標の設定の仕方とその目標に対する体育の位置づけ方によって異なってくると考えることができる。したがって、同学会の中でとりわけ教育論の中で体育がどのように期待され認識されていたかを検討する必要があるだろう。また教育論のみならず、先に述べたように国家や社会に関する論文、衛生論、体育関連行事（運動会、遠足など）に関する記事などからこうした体育論の相違の意味するものについて考察する必要があると考えている。

注

- 1) 筆者はすでに、同題目で『西友』・『西北学会月報』を中心にして『日本社会事業大学紀要』第33集、1987、一『大韓興学会報』を中心にして『日本社会事業大学紀要』第33集、1988の二論文を発表している。
尚本稿は、1989年10月28日韓国ソウル大学で開催された第1回韓日体育・スポーツ史・思想研究交流セミナーにおいて口頭発表した「太極学報における体育論文について」を整理し、その後発表された研究論文の分析を通して加筆したものである。
- 2) 郭亨基、近代学校体育斗展開様相斗体育史の意味、ソウル大学大学院、体育教育科、教育学博士学位論文、1989
- 3) 李學來、韓国近代体育史研究、ソウル、知識産業社、1990
- 4) 郭亨基、前掲書、pp.213-217
- 5) 李昌煥、知育は体育に如かず、太極学報（宥）第3号、pp.53-54、韓国学文献研究所、韓国開化期学術誌13、ソウル、亜細亜文化社、1978
- 6) 崔昌烈、體育を勧告する、同前、太極学報（宥）、第5号、p.48
- 7) 張膺震、我国々民教育の振興策、同前、太極学報（宥）第3号、pp.7-14
- 8) 禹敬命（訳）、教育の目的、同前、太極学報（式）第10号、pp.17-19
- 9) 文一平、体育論、同前、太極学報（肆）第21号、pp.13-16

- 10) 研究生, 学生の規則生活, 同前, 太極学報 (貳) 第14号, pp.12-15
- 11) 李學來, 前掲書 pp.20 -25
- 12) 前書 p.37
- 13) 前書 p.39, pp.43-44
- 14) 「太極学報」解題, 同前, 太極学報 (卷) p.Ⅶ
- 15) 前書 p.Ⅵ
- 16) 前書 p.Ⅹ
- 17) 李昌媛, 前掲 p.53
- 18) 前書 pp.53-54
- 19) 前書 p.54
- 20) 崔昌烈, 前掲 p.48
- 21) 前書
- 22) 前書
- 23) 文一平, 前掲 p.13
- 24) 前書 p.13
- 25) 前書 p.13
- 26) 前書 pp.13-14
- 27) 前書 pp.14-16
- 28) 前書 p.16
- 29) 文一平, 我国青年の危機, 前掲, 太極学報 (肆) 第24号 pp.29-32
- 30) 文一平, 我輩青年の危機 (続), 同前第25号 pp.26-28
- 31) 文一平, 我国青年の危機 (続), 同前第26号 pp.22-24
- 32) 李學來, 韓国開化期の社会体育史研究 p.26, ソウルアジア大会学術大会紀要, 1986
- 33) 李學來, 近代韓国の社会体育史, 韓 第108号 pp.23-24頁, 韓国研究院, 1987